

1833  
1833  
3

繪本左閻記第三之卷

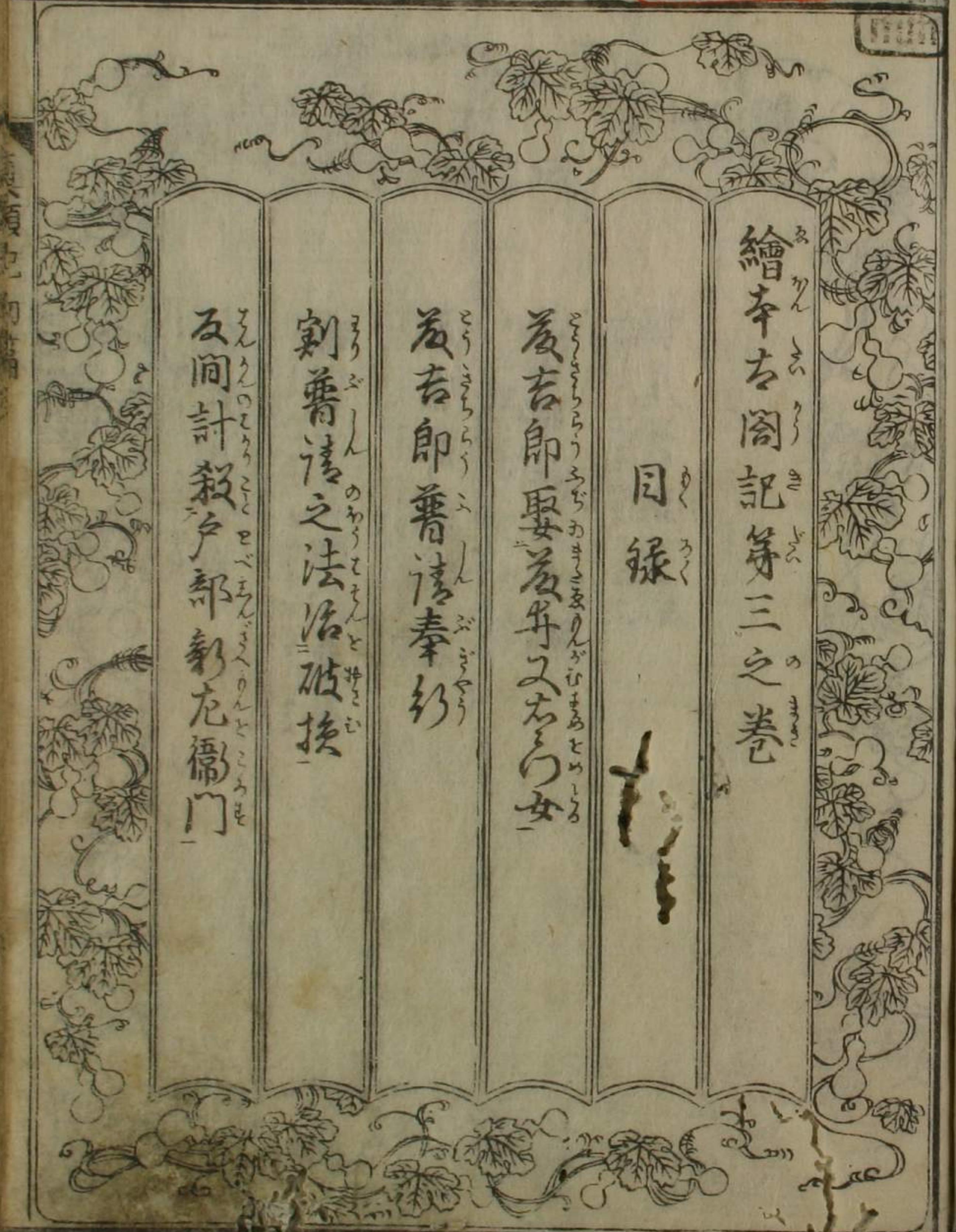
目錄

義吉郎娶義井又右の女

義吉郎普請奉行

剝普請之法活破核

又間計殺戸部新左衛門



佐々川合戰

福富平左衛門久井

若吉郎獻計策

小田勢抜岩倉城

堀尾義助力戦

繪本太閤記卷之三

若吉郎娶若井又吉の女

流法則生で獨陽の則長せど故み天地の配の陰陽を以て  
男ち女とみて室に女ハ男をみて家に人をみて人生の偶々夫婦  
をみて陰陽和して後兩澤深くま婦和して後あらむ  
より信長卿の足程慰安井又吉の女あり名爲八重と呼う  
えり家家風堂へと申ゆ出生せり女ならしハ弟の業と號す  
に加え容貌駿美紅粉の色を備びて自の國を此卿中以  
間一友と信長卿の小姓院又田大政代と/orる若者  
ありけりと慈慕媒人とみて又吉の女と乞うても大喜  
び先嫁め物語を以て女八重と號すと思ひ久し



女太夫代嫁んのを極ひ又の麻衣を物せりと恨む妻  
ゆひく又ちの中村辰吉郎とおきげ次男を物語太夫代  
ひと若て婚姻異変の縁を斗つても辰吉令承して太夫代  
が御えもれ對面してとまどもし説ともえ東太夫代強  
勇の壯士なれば曾て从て承させた婚姻異変の誤意を解て  
其後よ返言とへととふ辰吉郎計策と構へ候てとちの  
女八重某と通じま婦の繫縫あり又こそ此車をかく  
夫度と嫁姻に絆しぬとども此より駄就とほこ是下使  
音とて某が罪と免へ此婚儀異変は絆で大抵かくに  
とふ太夫代甚也さうきそひ辰吉郎が計りて彼女に仰  
みゆ一男立へうそや辰吉あくた駄面冠者に斯まで  
迷惑一程くよ理とども太夫代まとく玄地彌々信長

御へやとす既又史官と辰吉郎大國へじなく又ちの  
夫婦よ此ゆを告ぐふをも詮方よく女八重よ此ゆを  
語とばれ女辰吉が醜面をきりて睨んで色を落とすちの  
夫婦よ此ゆを告ぐふをも詮方よく女八重よ此ゆを  
いよ／＼難堪一一件我一時の計策にくわくきらんとは  
思ひもよらずつとめて幸を延べ手て計策をばしと



若吉郎  
普請奉納

つとおもてに承引せば、夕暁の宴よりへんり  
御ひづく貝娘是ト嫁さんみを希ム所を君の御  
み達ノぬきばへづき至衰かづくとて終る若日と撰み娘  
大姫代を媒めくて八重と爰を嫁ま婦とて大姫代ひそ  
れ兩人が客神を伺ふよもに漏るけ一きもたつ八重が  
爰を嫁ゆう居の君み仕るおゝ理なうる爰若天子下  
掌権の附北の政所と称し後み高臺院と号してまつね  
ち此御方の奉なり

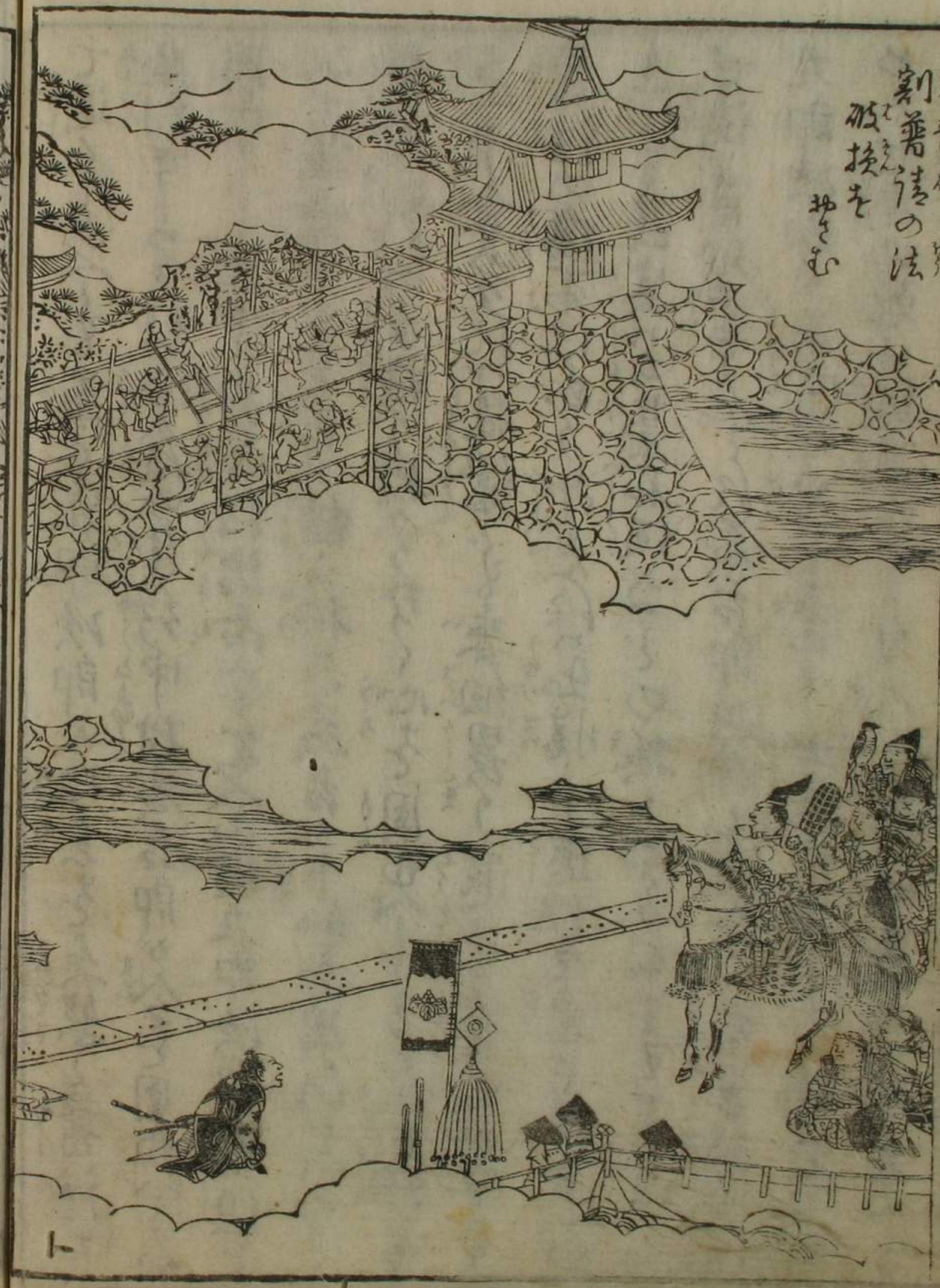
## 爰若即普請奉行

或付信長卿の居城清洲の城塙百圓斗兩とノア徳裡せん  
とて弓海の城々山湖左馬助がす丸即治郎を徳のき行は佐

付らん疊後をかど後復せらば人ども日が重てか徳  
既ニ二十余年よ及びてしが爰若即治あせり今戰國の中  
ニ挾み疊をゑくに蟄を深くとべき徳かくみかく等閑  
ニ教用がさしの危きみにあらじやと國の強敵率に龍  
素ぐ何よまで防ぎ戦りんや思ひぞうの甚きとほりと  
タク信長卿は一やましいにや小猿漫教用を費さむ  
ちく協讐石垣徳裡と引きもうとあらやと徳をば爰若  
清でやたらの某此普請の事行となれば三日の間ニ協讐  
石垣全く無能なししもべ早起を事行を始らヒ徳人  
をうづらひを成用しがるやうに織の被掛又教用を費さむ  
ゆゑ益のあらひにとやうす信長卿益て爰若即徳を量

知りめされば試みよ爰若郎を以て九郎次郎又代り  
廿三日の中よお送りくか紹うレシモドトと處々余命ド強  
爰若郎畏て余命集へ候てエエ左官の林深事と云てや付れ  
詔ひけ度の舊傳纏済石垣の修理又教日を費すと云ふ君の  
御事多甚よしとじ候て甚が故て奉行獄を替しめ候  
元石垣一坪と修理せんよ大ニ人を安一人か又小僧二人却會人  
を閑ひるべ一日にもか就としをあんば塙破換瓦百間かしひ乞  
を一隊又八九人宣ら世人殺又百人をみてか紹うレシモドト  
候えども要害堅固と構ゆり候うたんべ一日又出来と云ふ  
積うたれども三日と限らず當へ一先今日休是つて明日  
より出候と云うをナ凌とエエ左官川堤右の級役掌印

て退くとくも益々九郎次郎が内玄を玉懸と舊傳を  
述りテアラクレヒ今度の事例中村爰若郎が今と用ひぐる  
用ひまじきゆとあむ合私語居る處へ山側九郎次郎密絆と  
从て林深ともと已づ破又拓き爰若が下糸を用ひどいよく  
善傳述りの事極うぬく心を用ひてとて余命を  
よへや合ひらし林深とも委細異う退きう其日より  
善傳の陽面もくわが久に生情一送迎を急ぐ紹  
とども其寒い古臺石垣などの換うどあるもとゆき  
で後日以て爰若郎此紹をうなぐ前まほ山側  
九郎次郎が又心謀計と至る一士卒に命令して酒肴と家  
うちセキの慰よ休息を乍付くまたと鳴集らてやあつ



楓今日又朝う甚の生膳基にゆひく後足限う一石も  
ぬきう勞もく体んとて御酒を燭るるみ難く頂戴し先  
日うちれ様聲を教どぐとて調盃一酒肴を乞ひ人ま  
どもよとくしが大ニ充官もんにて收じみ難きゆりてか  
辞退い却て至れこと下地のわい會議もくまく君す  
やう辰吉郎人まきよ向しあとしてやうろいゆきづやまも  
信長卿の御饗地より一多幸妻まと徳とゆきび云ど  
とも君の厚恩をうけたまひやうを圓鄰圓惠  
く歎圓つて活世の時と署かうしが御城の継承も専く  
い財費しも給せざる其事へ太軍をみて襲ひ奉りハ信  
長卿ハ何よとくう歎と改き活りんや歎圓中へ私入せば町

紅村里を私坊一塙が妻ふ老ぢ悉向刃の手よ命令と  
一匁を溝洫みそらきとぞ一詔く忠と思ひ函をそ  
此善情悟くも立たずか務省細聞て一時もよくか轄うけ  
し一右御褒美とて名同武百貫文の御朱印とト一  
錫りとそよ難く頂戴つて一嘗傳加給のとて御朱印  
をそて右名同よと賛錫りべ大切に納うゑ下先にモヤレ  
ざく御飯かに住む海をなしばから御褒美とて乞うく  
とも君の仰る身のねなしにせもげを勅しげき若のゆめゆと  
仁風流と信長卿君子の恩賞を燭ふと既に思ひま  
即座もなじやと信義とぞし室情外吐泣させし  
本末あづれが裡よあつて感じるるのなむよあじ人ま

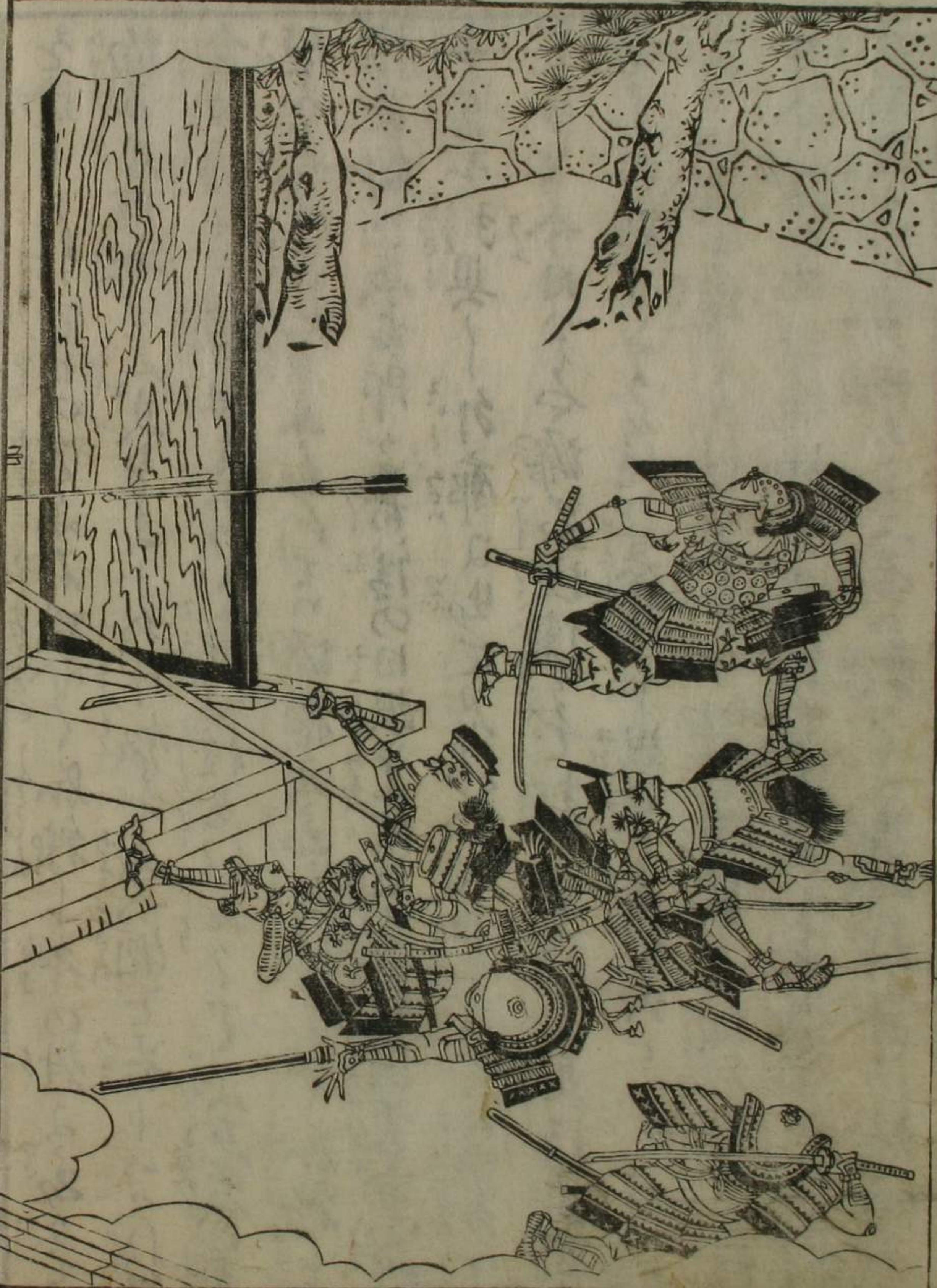
辰吉郎が演説を終り、先駆を悔と二日の内に心を吐露せしときは返善をアヒ服アテ若翁の宿泊の如きを割善法は破換

根も據善情の人まだも九郎次郎がるをとて

考へるが今度の事終て下辰吉郎温訓の教訓と先駆を悔と信長の仁惠を恵び其の意旨より郎の慰み絶不<sup>アフヨ</sup>集う株塗の下効ひ己くが場不<sup>アハ</sup>割付一隊<sup>スノ</sup>とて室め息ともたげ汎水よ爲て働きうる辰吉郎元と見くらゆ甚修ひ好言をして櫻德<sup>シラキ</sup>一粒<sup>イチ</sup>下効と櫻<sup>シラ</sup>と櫻の櫻<sup>シラ</sup>を觀<sup>スル</sup>と自らの場<sup>カタ</sup>と生情<sup>シラニ</sup>とて別<sup>アハ</sup>又人ままでち砂と運び石成<sup>スル</sup>者<sup>ス</sup>又三十人を石籠<sup>シロコ</sup>の園幸

を達<sup>スル</sup>しが本日の弓小石圓全く無能<sup>ムカシ</sup>一年の慰<sup>スル</sup>とて相<sup>シ</sup>みあがおて人まをまぐら中飯<sup>ミヤク</sup>をよへ酒<sup>スル</sup>と考<sup>スル</sup>とて食<sup>ス</sup>ゆ終<sup>ス</sup>て休息<sup>ス</sup>もなく車<sup>スル</sup>と極<sup>ム</sup>とて五<sup>カ</sup>日<sup>マ</sup>また安<sup>スル</sup>と望<sup>ス</sup>をぬと其の日又もて<sup>ス</sup>櫻<sup>シラ</sup>橋<sup>ヤマ</sup>ふもとを歩<sup>ス</sup>るく筋<sup>スル</sup>と信長郎<sup>スル</sup>辰吉郎が善情の自限<sup>シラニ</sup>あれよく其の意方<sup>シラニ</sup>を考<sup>スル</sup>と<sup>アハ</sup>奥<sup>アハ</sup>外廊<sup>スル</sup>と出<sup>ス</sup>て見残<sup>ス</sup>が時日<sup>スル</sup>とまことに嘗<sup>ス</sup>の義中<sup>スル</sup>なじ<sup>ス</sup>が今日<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>源<sup>スル</sup>石垣<sup>ヤマ</sup>橋<sup>ヤマ</sup>とで輝<sup>ス</sup>く<sup>ス</sup>とえほ<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>全<sup>ス</sup>く加能<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>基感<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>辰吉郎謹<sup>スル</sup>で廻<sup>ス</sup>戴<sup>ス</sup>一<sup>カ</sup>枚改<sup>ス</sup>てやけ文<sup>ス</sup>の加能<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>場<sup>ス</sup>アシ<sup>ス</sup>が辰吉郎謹<sup>スル</sup>で廻<sup>ス</sup>戴<sup>ス</sup>一<sup>カ</sup>枚改<sup>ス</sup>てやけら<sup>ス</sup>今度<sup>ス</sup>の破換<sup>ス</sup>被<sup>ス</sup>後遂<sup>ス</sup>のみ能<sup>ス</sup>た<sup>ス</sup>し<sup>ス</sup>るか化<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>人<sup>ス</sup>又百貫文<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>勞<sup>ス</sup>殊<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>へ<sup>ス</sup>是<sup>ス</sup>に報<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>當<sup>ス</sup>百貫<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>斧<sup>ス</sup>備<sup>ス</sup>と

五と間ことの計  
五と間ことの計  
五と間ことの計



主一清少納言難くのうと輕いしげ信長卿此旨許容し  
珍い即時み計百貫文を以て珍よ後右郎太に候じ乞をもて  
太玉た官の株梁めあらぶへ先の朱印の候うなうがる所也  
名づ人まども候じ零も其仁徳よみほそり此書は遠くから  
純やくの後右郎が才智衆々秀一をと信長卿と略ら  
あくせ家中一統其計策を感じよう

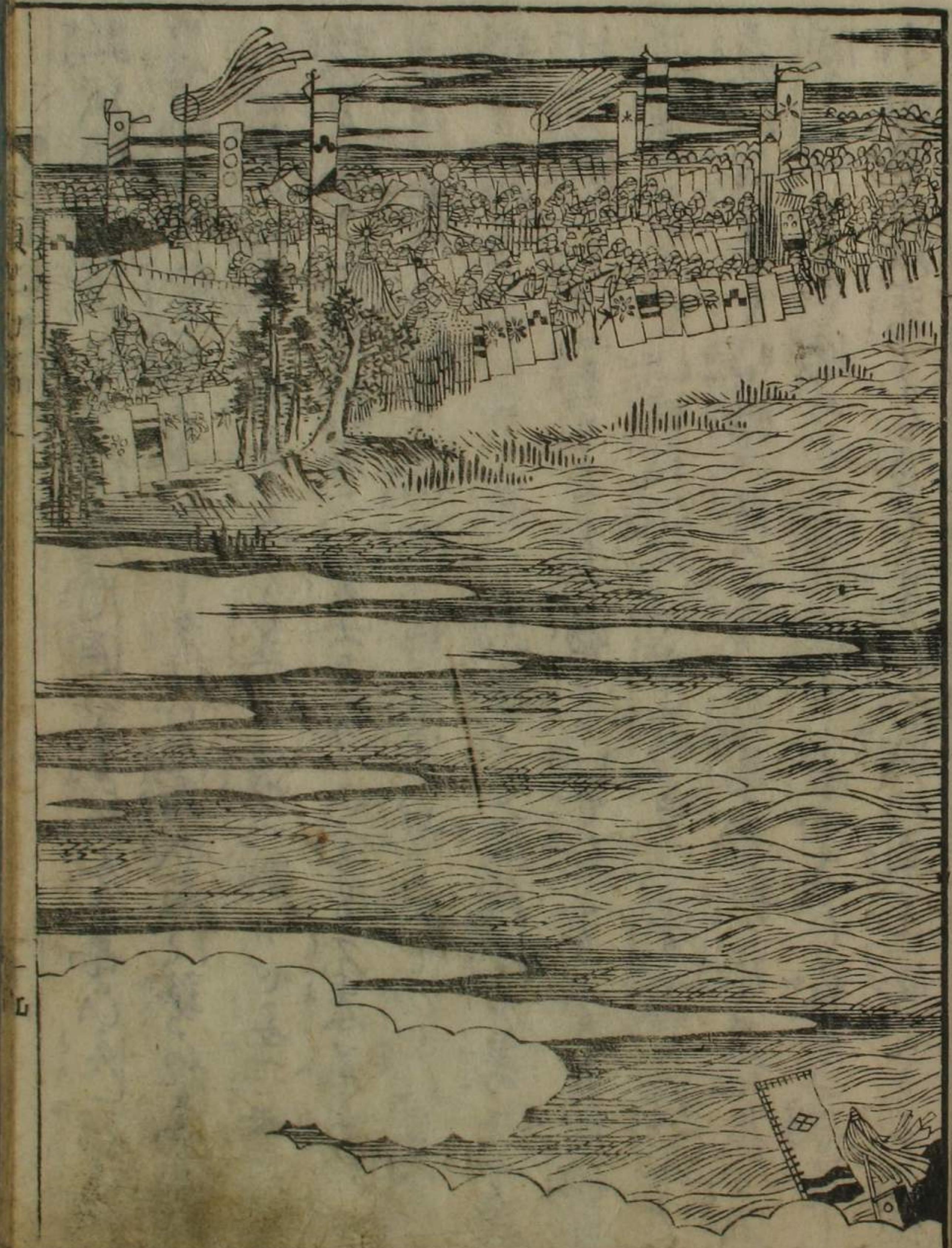
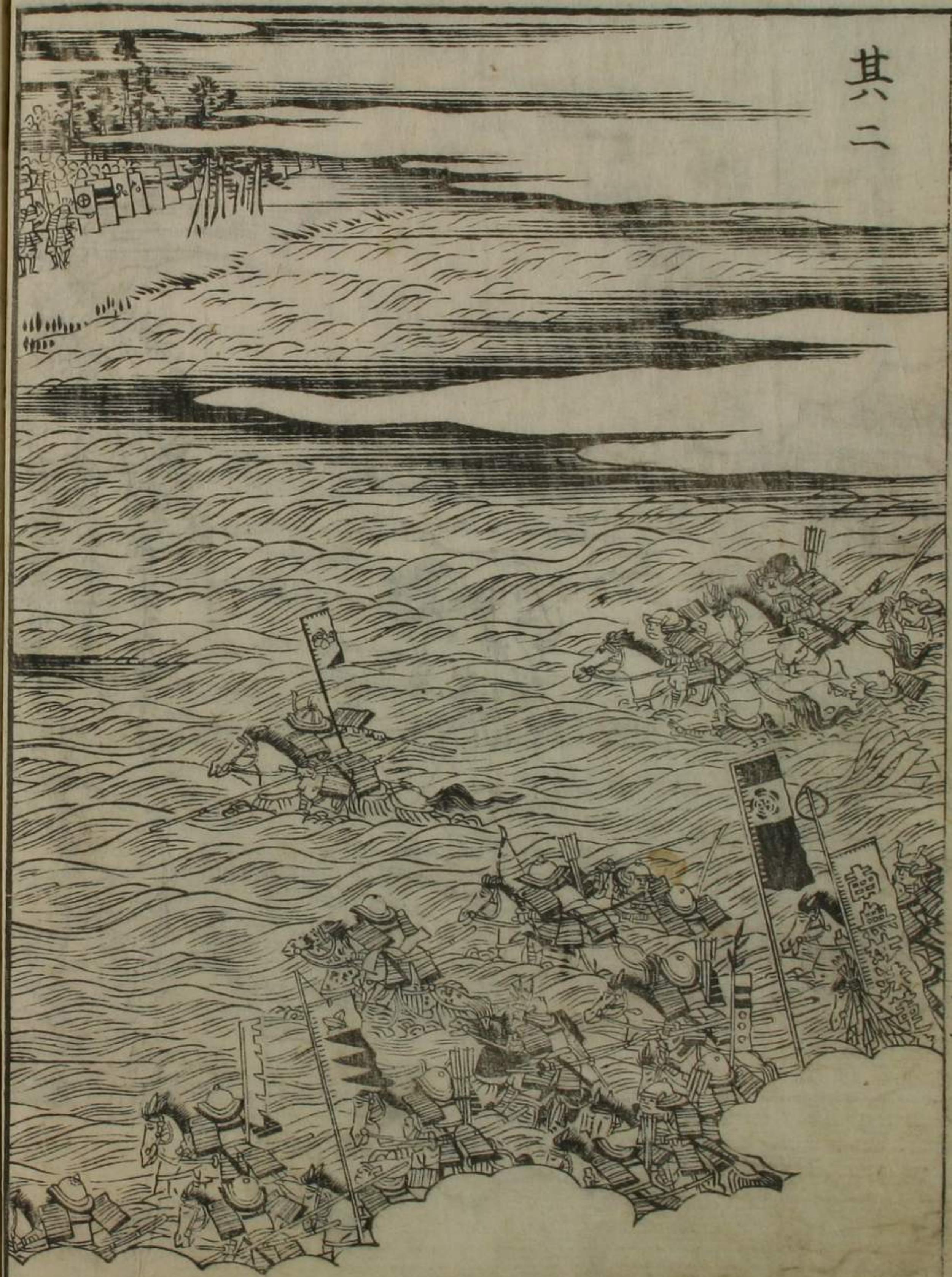
又同謀殺戸部新左衛門

此山渕又より小田急の因にちりか去天文十九年今川義元  
幕下とめりて呑海の城に指籠り叛逆のきく敗れせり此年  
信長十七歳軍勢八千車一呑海城を攻め既て山渕又  
勇ふと容易征くとく其経捨並満ひくが信長卿の威

勢日く月くよ豊かうじうば永禄元年山渕又と落葉乞く畔  
九郎次郎と信長へ勤仕させた馬久へ呑海よみて今川の押  
を私と是実の源氏のゆうびにて義元と信の切裏切とべき  
斗賛くされが九郎次郎今度の城被縦も懲り出来延引をせ  
く今川方の役ようさんことを計らふと後右郎が才智よ  
く首尾立ちとび出仕をも止まん難くして難う居  
里夏右郎山渕又よぐる心をあく信長卿へ進めて左馬久  
多バ備モ今川の功臣笠寺の城戸部新左衛門を討へし  
其斗異り森三左衛門を商人よ仕立笠寺の城へ入込せ難かつ  
が自筆の書翰が需り其筆名を謀へて信長へ譲り  
山渕又を殺さざきよの書面をにらみ九郎次郎が



其二



既成而て右戸部が信長用通の書簡を奪ひて  
や高海の城た馬久方へきりとんへ左馬久方に勝れ急ぎ  
元其前進し令を文と至寺の城へ押しこと二女三月  
攻うちうそ部新たる勇士たちとくもえ本不志のゆ  
うそ防歎のを配ちく山側が勢城中へ丸をて切られ其の  
禮を着とおひまむかく素肌こそ餘所持を兵六十騎  
計突殺し今に見までとく脇をきりて死うりう十九節次節  
湯湧よりてしてば傳人甚難とさ文が不ねをまんと  
死に絶まく高海の城へあり左馬久が物語え信長が反  
間よ當つゝと始めて脅すよ／＼驚き恐怖  
小田勢の攻来くるを恐れし合戦の用意匪くこそ盈

夜易きをひよ／＼信長卿戸部が討死を度々伏せて  
あた笑ひ夜を郎が才智人よ猶もと密よ感じ得ひう

## 佐矢川合戦

永禄二年に月十七日勢名小畠和教二万余騎を以率し  
信長を攻んと佐矢川へ出張と信長卿も又余りて止陣  
し給ひ佐矢川を中心として對渡しにまど散て敵と信長  
諸君をめきて軍の没落をうふ紫田勝家佐久間信盛河  
を捨て遂に寡をひきよ敵せば敵は大勢味方へ小勢此不ぞ  
の合戦心元より湯湧の本懸よ引退き疊をえよ／＼邊と源  
にして敵が往びとて附よ遙東席よれへ居する中村義吉  
即身幸をえてよ笑ひ勢名の軍勢何万ありとも是螺

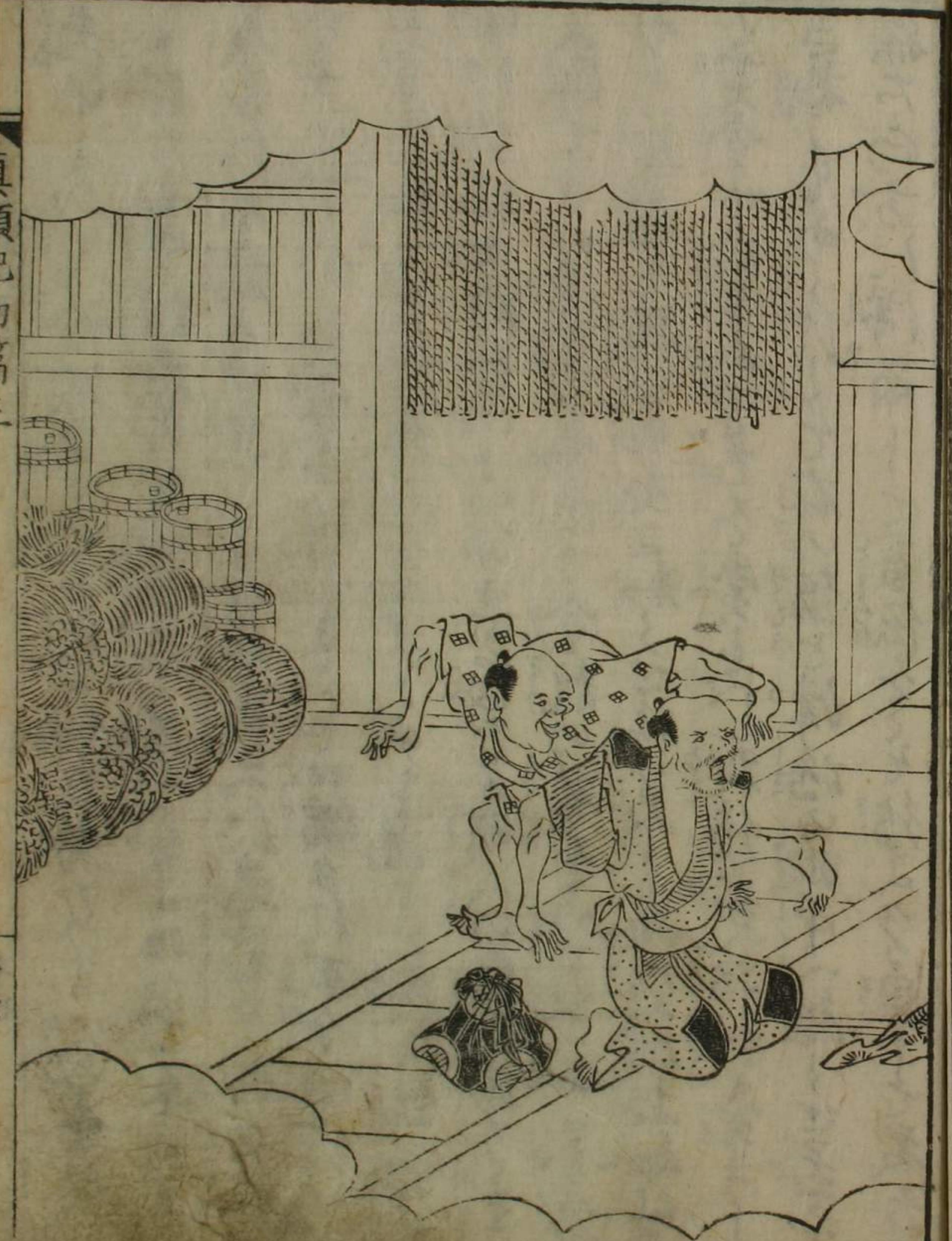
の群馬ぐんまより合戰あつてん味方みかた十じゅうかの勝利しゆりより川を渡わたる  
を始はじらす基もと百姓ひゃくせいの衆しゆうとして密ひそ々敵てきの傍そば川かわに停てい  
陣じんを設おきめ敵てき川かわより川かわにて休勢きよせいを構こうへ味方みかた後あとより引ひき色いろんで  
戦たたかいとと味方みかた其その槍やりをして姫ひめ急いそ々戦たたかいよが敵てきのそ繋つなれ  
の用もちへ立たつべきとと信長のぶなが大おほきに怪あやびよが義ぎ左さ郎ろうの涉わた川かわ  
印いん馬まと楊ヤシマともを差させよ義ぎ左さ郎ろうの涉わた川かわ  
義ぎ左さ郎ろうと印いん馬まともを差させよ義ぎ左さ郎ろうの涉わた川かわ  
義ぎ左さ郎ろうと印いん馬まともを差させよ義ぎ左さ郎ろうの涉わた川かわ

の曾のぞてもよしとよしとや小こ田だ駿じんの川かわを渡わたとぞ仰あおり貞さだ  
男おとこの國くによしとよしとをよとよとて見み戰たたかひ且また至いたる畠はたけ本もと田た佐さ久くの間まにあ  
勢ぜい也やもよしとよしとで兩ふた方がたすり休勢きよせいをす破はすととあらひて  
よしとよしとせ勢ぜい列れつ勢ぜい筆ひへお遠とおとそと風かぜみ本もとの榮栄の教おうぶ  
ととくさんさんぐにちうつて迎むかえうるが佐さ矢や川かわよりたまう深ふかど  
大おほの川かわの奉まつ城じまきへ退しりぞきよしとよしと信長のぶなが御ご勢ぜい列れつ勢ぜい筆ひの軍ぐん勢ぜい又また佐さ久く  
ああ戰たたかいとと佐さ矢や川かわよ凍こごめととて嚴ひざよこそおおう

福富ふくとみまたまたうええ幕まく

馬まを相あももふこれと瘦とへうう小こ身みの人ひとと相あももふこれと  
勢ぜい也やもよしとよしととと信長のぶなが御ご勢ぜい列れつ勢ぜい筆ひの軍ぐん勢ぜい又また佐さ久く  
ああ戰たたかいとと佐さ矢や川かわよ凍こごめととて嚴ひざよこそおおう

後宿平左衛  
笄を



先ひとまご 沈候させども又よ知れ者かく 人みあひつ  
よ若て云中村義吉郎 盜にて匿と云ふゆひて卒た  
義吉郎を絶ゆる甚へ 義吉郎方に迷惑り 我名  
なうをゆくひ 犯悪名が世あるこそ口惜され不全は盜  
をさじ生さんひ悪名を雪くゆを滑ドと密ニ津嶋の  
町に移居因縁有つゝる豪富ちう町人の家にて  
み遊てゆの活潰を物語り 令龍の筆をみて候べぬ者  
あゞ其者を捕へ延々とせめりて身を賣らば化家へお糸賣まで  
を差金十両をみて身を賣らば化家へお糸賣まで  
きねりもあゞびとて右の姫と津嶋の町中へ福させ玉き  
豫たる方に満面してあ伝をこそねよう果して義吉

即が推察よ遠いと足輕衆の者一人豫をつゝ家みきつ  
令龍の筆をみて神又要文を備んと云ふ義吉即候ひ重  
掘め捕て信長卿の御前へ引せ始終のゆゑと云ひて是  
よりえ福富すなうけりをやと其家至る紀さんと義吉  
即とめられど多方から逐電せりは盜械の義吉即  
お邊かくと陳中は呼びうぐくと御りども信長卿ハれを  
候ド候うじて義吉の太よまなうひうじて盜械を掘め左うは  
せんやす徊てそあらめと恩一々を盜械を掘め左うは  
まー石しよよ福富をめんしゆのかまきを候ド候ひ汝  
武主のゆこまれ已が事せらかみ左う算と矢よまく差根  
ちうを振系わる小剣一本の安否久もふまん候ヌ罪ヌ

き者を訴へ生已が瓶をえんととるる參く武まの毛弓且  
あらじ信長が居ててお啼呼の曲者ありと化圓よは  
せりんも面白はし今日より永く勘當するべと大手に  
響りて奉給へば平たのやよがをと向ふく赤面にて居  
うううれし處を節まうり出謹でやようりの君御聲  
外へてえうぐしき甲冑をまへ不持せざればか教義  
を蒙るも皆某の不徳のまへ不れて他人の邊り  
ひあらじに平たの君の御聲が蒙るつだうる懲りくな  
ひりんまでの功をみて今度の満りと償へめ縁を寄付  
の御をうひとお申一統恩情限りぬる也」とさまで  
と名乗るせ終ふ

立あへやされ信長御辨へ感ト泣し極嘆とその  
まゝ勅はせらるる處を節づ今度の軍費えとて又百貫  
の不充を以て陽城と因老居本下雅乐院が家公從て新來  
れ厚くめを援がりと是が中村と改め本下處を節ま  
と名乗るせ終ふ

### 處吉郎獻計策

去程又小田信長佐多川を陳拂りて本城へゆき行ひて  
も勢利の密接を伺ひ候ふと小田家の勢いよ思ひ軍勢と  
生とと見勢うきよはせ候ひまは信濃守の置ぬ因よ  
勢利と化代とべーとて諸侯を立て本陣の御下知あり  
本下處をひくゆきほどの御本陣こそ味方の勝利を度す



左團ひて根とたよし猪つんと肝要なしと度く塗云や  
されば信長甚蠻り多ひ安佐内の軍功に傍で我令を固  
ひど不吉の云系あ怪く私勢例を卒活一政協どると出仕  
彼とぞびとて亦輕死えせびが紫田佐久間が安常く  
義若郎が生むつる所惡みなしより教訓之こ處を悟ひ  
くわ矣く退出と信長卿元来恩義深き大ねなれば其  
僅で言上一そり岩倉の城主小田伊勢守死去せると左  
老臣小田七郎たる日源たる山内伊之助等伊勢守が初  
稚のふともえ味方合体の乞と承せども冥へ虚よりて  
我國を奪んと今君をも勢例と征一猪つ内安岩倉

よう軍一を紀一此を城を棄くべ某密計ひみ君  
勢例征伐と披露一猪ひ軍勢を佐内と出一也岩倉  
而ひ攻撃ひ城中不きのうなれど先發軍又及び一されど  
岩倉の名城ニ軍士々小田七郎たる猪尾忠ちんと度ゆ  
勇者なれど容易よ落城ひ故とまくゆくくみ計猪り  
一時よ大功を立ぐ一ちうと信長卿の御耳又は付謀と云  
ことと信長模々をすてたによろこび猪ひ軍後救慰よ及  
び義若郎の退出一そく本下が計ひ岩倉落城の章にてあ止  
信長攻岩倉城

去程み信長卿勢例征伐と号し其勢三万余騎三日足  
うち先陣柴田勝家後陣ハ佐久間ちの自中陣よ備て

勝家  
織田七郎  
左近と  
折丸



佐多川へ生張へ此にて勢列征伐といひて、實に岩倉の  
城を攻えと下りて、終へて諸軍大に勝利し信長の軍も  
鬼神も計らずとぞ感じあり。さうか歎の不二をあぐ  
うてありとこりんで岩倉へ押寄る縦破を以て後砲を充  
ひよひよ攻きし城中より小田七郎たちの日源なる塔屋  
を二度三度攻きし城中より小田七郎たちの日源なる塔屋  
忠左衛門切先をなまぐく討て生火あふれく戦ひし  
をうつ城中思ひとうづく合戦なれば武ととゞとども信也  
よ切破られ小田七郎たちも柴田勝家よ討て御城中引  
入るをうつ城中堅く防ぎて出るは信長卿力よく食  
政みせんと対室へくるを本ト巣吉即連り柴田勝家密  
對面し我愚うて君の手算をもくび室へ心島追討と

心得御諫言や御まこと換りてあるやく悔としども益に  
不捨し合戦よ討死仕り衆下の鬼とみゆて愚極ちる系が志  
を放り一度おもふてそとまつりひらりし足下のは慈悲して士卒  
の軍一伍加へ下されば死の後も内斬おゆく御不與御免下され  
りゆう備え難ねうと一滅をうじゆくけきば柴田元より強  
きを凌ぐ弱きと助る生贋ならしに及若が不など大に感心し信  
長卿の御意に生若即ひ新ひ洋よ云ふて一方の大内御免  
下されぬよ。經じまびよふぞ信長卿へ並て若と計算と  
定め給ひたが懸と面をとづらげ身の若が推進甚その  
謂は追々と如かれども其方が推舉も禁止がござり故に攻  
みゆく一つの功を立べまを嘗て密謝しと傳せ

岩倉ノ瀬城



後されりに紫田み難一と退出一と後吉み右の次第とば物連  
此度の戦いにも我功を立達ゆう御不與御免お邊みまし  
とやされば為若其扇とく居寄素此敵を一戰よ勝ヤム年署  
もう乞と功より度處の位を以て御不與御免トシテマシテ  
とやされば紫田其計署へうと同義若紫田が耳に口承よせり  
サリと密達タリしれば紫田大に恵ひ已がも勢又百人を差若  
ヨウラヒニ滿隠ヘ屬て合戦の圍を區くちう後吉即懲絶と  
軍勢と西兵として生約ナリ

## 蛭尾兵助力戦

岩倉の城の西南より一つの山あり岩倉山と号ひ是者  
即五百人の士卒と引き一山と之を樹木と切紫本と接続

美烟硝をさき入時のより候待居するわす申の下慰う  
西風をびくく吹起し積雪一樹木一日本より少と無縫波と  
さとよされば城中大きよ發るき波をして足くらしは少光天  
をこじよ煙硝を覆ひ太石火坐てはまく城中へ吹送  
危險が何うせでなうべき城戸をしきくして一日よ遡出久候  
りうける小田の軍勢紫田佐之間を始めとして狼狽ます  
岩倉勢を攻よ切らせかくこそ難立に角八面よ追う反対  
塔尾義助へは年十六歳又太ちつ太勢ようこまれてうばまて  
太ちつ太と美向よほしかざり群小固勢と右よ塞き左よ塞き武  
切てあ後ヒ東西よ縦南ゆよ破り一通の血流死しりき縁よ文  
思立つを殺し生ノ石火奪ふく退き塔尾義吉郎ある吉山

城尾辰助  
力哉



よより此血戰を乞ふて參れ士卒を以て其性名を回し  
卒ろに般お軍中の勇士性名をもと大者と呼べし  
尾長助右吉と云ふ義吉歎してものぞれ勇士我師を以て  
さばやといたゞやきさうが後果して居下しゆまう根も城兵右  
往左近よ教亂一ノハは勢ちが初雅の児も其の方とまづ之處  
テア毛利義吉即が信長卿へ上り斗第之信長於て岩倉井  
入野ひ諸士の功を称一ノハ紫田義吉郎と説ひ河童の兵出はる  
の義城志く義吉即が計策してリバ御勘定御免下されりと  
云上一ノハ信長方に候び終ひ義吉郎のひの城く出仕といひ  
とし船中勝部が勧き七郎左衛と討迄勇武接觸のひを度せ  
厚く袖手致ひ

